

Eureka VII

六年制通信 No.38 令和3年3月19日(金)号

北京の雀

明治政府が「邑(むら)に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」と全力をあげて、義務教育の就学率9割を達成したのは明治35年です。勝海舟がその3年前、伊藤博文はその7年後に亡くなっています。そんな古い古い時代の話です。昭和48年には高校への進学率が9割を超えました。そのころ私は中学1年生でしたが、高校へ行かない、あるいは行けない同級生が何人かいました。家にお風呂のないのは普通だった、そんな時代のことです。最近は特に昔を思い出します。これもまた老いの兆候でしょうが、私の場合、自分の生まれた頃や青春時代ではなくて、思い出しようもない昭和初期や大正そして明治の人々に会いたいと強く思うのです。明治に生まれた人たちの文章の方が私にはしっくりきます。先日うっかり国会中継をラジオで聴いてしまいまして、彼らの語彙の貧困、下品な抑揚に戦慄してしまったので、よけい昔の知識人の言葉遣いに憧れるのでしょうかね。あの頃に生まれたかったなあ。

さて、明治35年からおよそ120年、今や大学への進学率が54.4%、つまり国民の半数以上が大学教育を受けるようになりました。短大や専門学校など、高校を出てからすぐに社会に出ないで何らかの教育機関に進学する人なら、なんと若者の8割以上が該当します。豊かな国でしかありえない数字ですね。きっと、君たちは幸せなのでしょうね。そんなこと考えたこともないでしょうけど。

今年の受験シーズンもようやく落ち着きました。この季節は何度も体験していますがなかなか慣れませんね。受験は公平なものだし、悪いことだとは思いません。しかし、ずいぶん前のことですが、受験ノイローゼという言葉があちこちで話題にされたころ、東京大学の新入生の5分の1、約600名には精密検査が必要とされ、そのまた5分の1は学業に耐えられない程度で専門家による治療を要する、さらに数人ではあるがはっきりと分裂病と診断された、などと言われていました。これこそ受験勉強の弊害で、若者を追い込みすぎる、要するに詰め込み教育がいけないのだ、そうさかんに批判されたものです。受験勉強は悪いことではないのですが、精神的に追い詰められるほどの値打ちはない、私はそう思っています。

「北京の雀」という話があります。雀の被害を根絶しようと町中の人々がカネや太鼓で雀を追い立てるのですね。北京には人はたくさんいますから、一列になってジャンジャンドンドンと。雀はそんなに遠くへは飛ばませんから、ちょっと飛んではまた追い立てられ、これを繰り返すうちに雀がノイローゼになるのだそう。その様子と受験生がダブるので、ノイローゼになる受験生を北京の雀と呼ぶわけです。

もちろん、諸君は北京の雀になってはいけませんし、周りの大人もカネや太鼓で追い立ててもいけないでしょう。ただ、君たちを見ていると短期集中にすぎるように思います。それが自分で自分を追い立ててしまうのです。つまり、高3になってから本格的に受験勉強をする、これを当然と考えすぎていると思うのです。高3になっていよいよ受験生だ、などと考えるのは単なる世間の風潮に乗せられているだけです。受験がいつあるか、それは常にわかっているのですから、急に受験生へと変身するなんてあるわけがないのです。定期試験の一夜漬けの大掛かりなヤツ、そんな受験勉強をしていると心がささくれ立ってきます。

ですから、準備はできるだけ早く、余裕をもって勉強していくべきです。勉強を阻むもの、例えばテレビやゲームを遠ざけなければいけませんね。イギリスでテレビが普及し始めた頃、“the idiot’s lantern”と呼ばれたのですよ。誰が訳したか「アホの提灯」。さすがイギリス、皮肉たっぷり、しかもテレビの本質をついていますよね。観たほうがよい番組がたまにありますが、それだけで十分。あとは観る時間があったくない。ゲームは心の安定を促すベータ波の発生を抑えてしまい、本能を抑制する前頭前野の働きを阻害します。ま、動物に近くなるわけですな。昼夜逆転で朝起きられず学校へ行かなくて済む理由を考えだします。何時間もテレビを観たりゲームをしたりするのは一人で北京の雀を演じているようなものです。気をつけましょうね。

今週と春休みのおすすめ

・塩田武士 『盤上のアルファ』（講談社文庫）

狼の群れのボスをアルファと呼ぶんですってね。知りませんでした。

左遷されて不貞腐れている新聞記者と将棋のプロ棋士を目指す若者の青春、と言えばカッコいいのですが、もっと泥臭いかな。塩田さんのデビュー作らしいのですがプロットに筆がついていないし、まだ文章も展開も粗さが目立ちます。プロット自体が面白いので読んでしまっていますが、丁寧さが足りないな。柚月裕子さんが将棋の世界を題材に『盤上の向日葵』を書いています、読み比べると力量の差が歴然ですね。塩田さんも柚月さんもそれぞれの『盤上の…』がドラマになっていますが、私は塩田さんのを見逃しました。観た人に聞くと大変良かったとのこと、残念。

さて、春休みですね。後藤正治のノンフィクションなんかいかがでしょう。前にも紹介しましたが『リターンマッチ』（文春文庫）は定時制高校で英語を教えながらボクシング部の監督をする脇浜義明の日常を描いています。私は今でもたまに読み返しています。『はたらく若者たち』（岩波現代文庫）の扉には「かつて日本人は勤勉だった。切削油の匂い、坑道にたちこめる炭塵、甲板に照りつける真夏の太陽、闇に浮かぶレールの鈍い光、滴り落ちる汗、酌み交わしたコップ酒……そんな情景に、はたらく若者たちの秘かな吐息が聞こえる」とあります。どうです。読みたくなるでしょ。

きっと君たちは、今、勉強のできる立場にいることを（つまり働かなくてすんでいくということ）を）有難く思うことでしょう。

BGMはB'zのALONEでした…。